手短な独我論論駁

篠　原　成　彦

キーワード：独我論、規則に従う

ここでは「**感じ（feel, feeling）**」を、色や音、においや手触り、味、痛み、痒みといったものばかりではなく、嬉しさ、悲しさ、恐怖感、嫌悪感、爽やかさ、違和感、そして、疑わしさ（疑わしい感じ）やもっともさ（納得がいく感じ）、さらには――そんなものがあるなら――自分が何ごとかを思っているという感じなどをもカバーする言葉として用いることにしよう。こうすると、現象主義（あるいは主観的観念論）の存在論的帰結としての独我論を、簡潔に次のような見解として特徴づけることができる[1]。

この世界は、私に生じるさまざまな**感じ**だけでできている。	……①

私が以降で試みるのは、このように特徴づけられた独我論の論駁である[2]。私の見るところ、こう特徴づけてしまえば、独我論を論駁することは比較的たやすい。とどめの一撃となるのは、規則に適っているという**感じ**は、規則に適っていることの代役を果たせないという事実の指摘である。

1　独我論者の言い分を聞いてみる

しかし、そもそもいったいどう考えれば①がもっともなものに見えてくるのだろうか。それを理解するために、ここでは一人の独我論者、その名も独我論子（どくがろんこ）さんにご登場いただき、私の質問に答えてもらうことにしたい。じゃあ論子さん、よろしくね。

論子　ええ、よろしく。

篠原　独我論の動機や根拠を理解するために、これからいくつか質問をさせてください。最初の質問はこうです。そもそも、世界が色や音その他、あなたに生じるいろんな**感じ**でできているだなんて、いったいどうして言えるんですか？

論子　私は、次のように考えたんです。まず、この世界から音を奪い去っても、世界が消えてしまうわけじゃありません。音のない世界が残ります。

---

[1] 大森荘蔵のいわゆる**立ち現れ**を、彼の意に反してあからさまに主観化したものがここで言う**感じ**だ、と言ってもいい。

[2] 永井均は、「実在するのは自己とその意識内容だけで、他我や事物は自己の意識内容に過ぎない」とする見解を「強い意味での独我論」、「外界の事物の存在はともかく、少なくとも他人に関しては内的な心や精神や自我の存在を認めない」立場を「弱い意味での独我論」と呼んでいる（『岩波哲学・思想事典』p.1176）。そして永井自身は、後者に重きを置いた考察を展開してきた。しかし、私がここで論駁を試みるのは、もっぱら前者である。

篠原　ふむ。

論子　さらに世界からにおいを剥ぎ取っても、世界は消え去りません。音とにおいのない世界が残ります。

篠原　ふむ。

論子　だけど、音とにおいに加えて、さまざまな色、味、熱さと冷たさ、ざらつきと滑らかさ、などなどを次々に世界から取り去っていったら、そのうち世界はすっかり消え失せてしまいます。このことから、「色や音、においや手触りといった私に生じるさまざまな**感じ**が、この世界の構成要素だ」と結論するのは、きわめてもっともなことだと思うんですが、そうではないでしょうか？

篠原　だけど、この部屋にある椅子や机にしても、そして私やあなたにしても、さまざまな分子、というより原子、というよりもっと微視的なレベルの物理的対象からなる事物だということは、とっくの昔に常識ですよね。そして、色にしても音にしても、我々を取り巻く環境から我々の脳の奥深くへと到る一連の物理的プロセスがあって出現するものなんだってことを、我々は学校で教わっています。ですから多くの人は、こうした現代科学の初歩的知識によって①は一蹴されてしまう、と考えるはずですよ。

論子　ええ、そうでしょうね。でも、微視的レベルの物理的対象からなる世界って、はたして本物の世界なんでしょうか。私は違うと思いますよ。微視的レベルの物理的対象、たとえば電子を観測するとは、実際どういうことでしょうか。むろん、電子の姿を見ることじゃありません。電子の観測に際して私が見るのは、あくまでも観測機器の反応です。そして、観測機器の反応がどんな微視的現象に対応しているのかを決めるのは、物理学理論です。たとえば、「気化」「イオン化」「凝集」といった現象についての理論に訴えることなしには、いわゆる霧箱に生じた変化を電子の軌跡とみなすことはできません。つまるところ、電子のような微視的レベルの物理的対象を観測するとは、色や音や手触りなどの**感じ**でできた世界の内部で、見えも聞こえも触れもしない世界の物語――ただし、**感じ**でできた世界に起きることを予測するうえで有益な物語――を創作することにほかならないんです。だとしたら、そうやって創作された物語上の世界を本物の世界とみなして、その物語作りが――作られる過程においても、そして存在意義においても――依存している色や音や手触りでできた世界を、まるで見せかけの世界みたいに扱うのは、まさしく本末転倒でしょう。

篠原　おお、なるほど。科学理論について、論子さんはE.マッハ[3]みたいな捉え方をしておられるわけですね。たしかに、物理学的な世界描写こそが正しい世界の描き方だっていう考えを、無批判に受け入れるべきじゃないでしょう。そして、物理学が描く世界の姿は一種の創作物だっていう考え方の可能性も、真面目に検討されるべきものだと思いますよ。

論子　ご理解いただいて、ありがとうございます。

篠原　では、次の質問に移らせてください。独我論のテーゼ、すなわち①にしたがえば、あ

---

[3] Mach, E., 1886, *Die Analyse der Empfindungen und das Verhältnis des Physuschen zum Psychischen*.
［須藤吾之助・廣松渉訳『感覚の分析』（法政大学出版局、1971年）。］

なた以外の人々はつまるところ、色や音、手触りといった、あなたに生じるいろんな**感じ**が織りなす景色[4]の一部だってことになりますよね。じゃあ、あなたご自身はどうなんです？

論子　そのご質問に対しては、申し上げるべきことが２つあります。１つは、独我論子だって篠原さんや他の人々と同様、私に生じるいろんな**感じ**が織りなす景色の一部だということ。もう１つは、「この世界は私に生じるさまざまな**感じ**だけでできている」と言うときの「私」とは、**感じ**として世界に現れる何かではなく、さまざまな**感じ**が現れる場にほかならないということです。この世界はさまざまな**感じ**だけでできていて、それらの**感じ**はもっぱら私に生じるわけですから、結局、私が世界そのものだということになりますね。

篠原　うーん、でもそうだとしたら、**感じ**でできた景色の一部としてのあなたと、世界そのものとしてのあなたは、いったいどう結びついてるんでしょう？

論子　さまざまな**感じ**でできたこの世界は遠近法的です。つまり、そこには遠景があり近景があります。そして最近景には、なぜかいつも「独我論子」という名前に結びついた顔無しの人影や声や手触りなどがあり、そして、それらと噛み合うように現れる快感や痛み、喜びや恐怖感その他の**感じ**があるんです。

篠原　ははあ、だんだん解ってきました。きっと、あなたにとって生きるということは、独特のアングルで撮られた長い長い映画を、たった１人で眺めるようなものなんですね。

論子　そうお考えいただいてかまいません。ただし、スクリーンのこちら側にそれを眺める私なるものがいるというわけじゃありませんけど。

篠原　わかりました。ではもう一つ質問を。世界であるという点であなたと同様の、ほかの誰かはいないんでしょうか？言い換えれば、世界は、あなたが「私」と呼んでいるそれ以外には無いんでしょうか？

論子　そうした誰かがいる可能性、つまりほかの世界がある可能性を、私は敢えて否定はしません。しかしそもそも、私にとってそれは考えるに値しない問題です。なぜなら、ほかの世界があるとしても、また無いとしても、明らかに、この世界には、いかなる影響も及ばないからです。つまり、私ではない何ものかに生じる**感じ**でできた世界は、端的に無いか、あったところで私にとっては無いも同然だということです。

篠原　なーるほど。論子さんの議論は実に明快ですねえ。

2　独我論を論駁する

さて、ここから私は、**感じ**を同定するということ、そして規則に適うということに関する独我論子さんの見解を引き出しにかかる。これは、彼女の独我論を論駁するためのいわば仕込み作業だ。といっても、この仕込み作業を終えると、けりはほどなくついてしまう。

---

[4] ここでは「景色」を、視覚的な**感じ**のみならず、音、におい、手触り、痛み、爽やかさなどなど、あらゆる**感じ**が織りなす、そのときそのときの世界の様子をあらわす象徴的な表現として用いている。

篠原　論子さん、一見ちょっと関係ないような質問をしちゃってもいいですか？

論子　ええ、かまいません。

篠原　ありがとうございます。それではうかがいますが、論子さん、あなたは、自分は赤さを感じているとあなた自身は思っている[5]――言い換えれば、あなたはそう判断している――のに実際に感じているのは青さであるとか、自分は強い辛みを感じているとあなたは思っているのに実際に感じているのは強い甘みであるとか、自分は滑らかな手触りを感じているとあなたは思っているのに実際に感じているのはザラつきであるとかいった事態が、生じうると思いますか？　つまり、

> あなたに生じているのが、実際にどんな**感じ**であるかということと、どんな**感じ**だとあなたに思われているかということの間に、食い違いは生じうるだろうか？　……②

ということなんですが。

論子　生じえないと思います。はっきり痛いと感じているときに、どういうわけか「痒い」と間違って言ってしまうのならまだしも、痒いと感じていると思ってしまうだなんて、わけがわかりませんからね。私が自分は痛みを感じていると思っているなら、そのとき私は必ず痛みを感じているんですよ。他のあらゆる**感じ**、すなわち、色、音、手触り、におい、それから味なんかについても同様です。たとえば、先に食べておくと後でかじったレモンやなんかが甘く感じられるミラクルフルーツっていう果実がありますけど、あれだって、実際に感じているのは酸っぱさであるのに「私は甘みを感じている」と思い込んでしまう、というわけじゃありません。ミラクルフルーツを食べてからレモンをかじったとき、私は、「私は甘みを感じている」と思っているだけではなく、まさに甘みを感じているんです。

篠原　つまり**感じ**の同定は不可謬だってことですね[6]。うん、予想どおりのお答えです。では、もう一つ質問させてください。①のように述べられる論子さんの独我論、すなわち、世界の全ての局面はあなたに生じる**感じ**でできているというあなたのお考えに従うと、たとえば、あなたの行った足し算の結果が、加法という計算規則に適っているという場合、そこではいったい何が起きているんでしょうか。

---

[5] 世界は**感じ**でできているとする独我論子さんにとっては、「…と思っている」ということも、本当は「…と思っているという**感じ**が生じている」ということだろう。しかし、そうだとしても私と論子さんの議論には影響しないので、煩雑になるのを避けるために、ここでは「…と思っている」と言うことにする。読者には、論子さんはこれをいちいち「…と思っているという**感じ**が生じている」と読み替えていると考えてもらえるとありがたい。「…と判断している」についても同様だ。

[6] ここでもし論子さんが、自分の**感じ**を自分が誤認するということもありうると言っていたら、私は以降のように彼女を論駁することはできなかった。しかしながら、そうした誤認はありうるとしつつ、なお独我論者であり続けることが可能であるとは、私には思えない。というのも、そうした誤認の可能性を認めることは、自分に生じるのがどんな**感じ**であるかはそれについて自分がどう判断するかから独立に定まるとすることを含意しており、これはすなわち、主観的ならざることが（よりによって）自分の心の中で絶え間なく起きているということ、つまり、自分の心の中にすら自分にとっての「外界」があるとすることにほかならないからだ。

論子　そういう場合は、そのとき私の視野に生じている**感じ**が、加法規則に適っている**感じ**を帯びてるんです。もちろん、こういった**感じ**から独立に加法規則というものが存在してるなんて、私は思ってませんよ。爽やかな**感じ**や落ち着いた**感じ**、釈然としない**感じ**や腑に落ちる**感じ**があるように、加法規則に適っている**感じ**があり、それとは逆の加法規則に背いてる**感じ**というのがあるだけです。まあ、前者は独特のフィット感、後者は独特の違和感のようなものですね。たとえば、私の視野に生じる**感じ**としての「**57＋68＝124**」は、私にとって加法規則に背いてる**感じ**を帯びています。

篠原　うんうん、そうおっしゃるだろうと思ってました。実際、世界には**感じ**しかないとするあの①を採るかぎり、そんなふうにおっしゃるほかないでしょう。ある**感じ**が別の**感じ**を帯びるなんていう、一風変わった言葉使いにしてもね。で、いま論子さんが言われたようなことは、加法規則のみならず、どんな規則にもあてはまるんですよね？

論子　ええ。私に言わせれば、ある行為が「規則に適っている」「規則に背いている」とは、例外なく、本当は、私に生じたある一群の**感じ**――すなわち、色面とその動き、聞こえてくる音、手触りなど、いろんな**感じ**のあるまとまり――が「規則に適っている**感じ**を帯びている」「規則に背いている**感じ**を帯びている」ということなんです[7]。

篠原　はい、ご愁傷さま。

論子　え？

篠原　あなたはたった今、ご自身の見解が完全に破綻していることを自ら証明されました。

論子　いきなりそんなことになっちゃうんですか？

篠原　なっちゃいますね。ご説明しましょう。まず、次の推論③を見てください。これ、論理的に正しい推論でしょうか？

前提１：加奈子が来るなら亮介も来る 前提２：加奈子は来ない 結　論：亮介も来ない

……③

論子　いいえ、間違ってますね。③の２つの前提は、亮介が来るという可能性を許容しますから。

篠原　ええ、仰るとおりです。じゃあ、次の文④はどうでしょうか？

加奈子はカレーライスを熟睡した。

……④

論子　ある種の文法違反とでも言えばいいのか、文として全く意味をなしていません。

篠原　はい、そういうことです。さて、ある論証が論理的に正しいか否か、あるいは話が「論理的に正しい」とは言わないまでも辻褄の合ったものであるか否か、そして言葉を繋いだものが文として意味をなしているか否かは、いずれも言葉の組み合わせ方や文の並べ方の問題です。つまり言語というやつは、言葉の組み合わせ方や文の並べ方に関するさまざまな規則を備えていて、我々が何ごとかを論証したり説明したりできるのも、またそもそも意味をなす文を作れるのも、それらに従うことによっています。そういう規則は、ものによって「論理法則」とか「文法」とか呼ばれていますが、以降ではそれ

[7] ここでは、「私に生じたある一群の**感じ**」を「ある行為」に対応するものとして読んでいただきたい。世界の全ては**感じ**でできているとする独我論者には、こういうもどかしい言い方をするほかないのである。

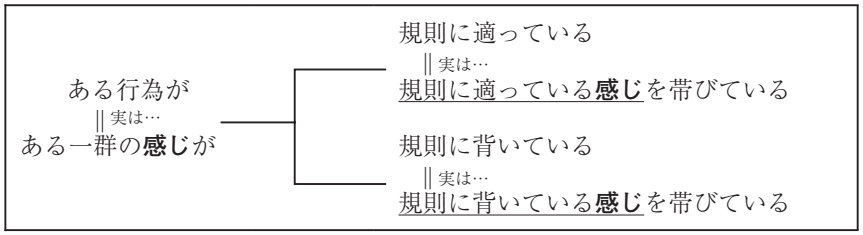
らを一括りに「言語規則」と呼ばせてください。ここまでのところはよろしいですか？

論子　ええ、けっこうです。どうぞ続けてください。

篠原　わかりました。では続けます。さて、論子さんによれば、あなたに生じるさまざまな**感じ**については、実際にどうであるかということと、どうであるとあなたに思われるか——言い換えれば、どうであるとあなたに判断されるか——ということの間に、食い違いは生じえません。あなたに生じたある**感じ**は、あなたに赤さだと思われていれば、まさに赤さであるということです。しかし、それに対して、計算や論証や作文など、なんらかの規則のもとでなされる行為がその規則に適っているかどうかについては、実際にどうであるかということと、どうであるとあなたに思われるかということの間に、食い違いが生じえます。たとえば、あなたがある足し算を間違ってしまうとき、その計算プロセスは、あなたには加法規則に適っていると思われているけれども、実はそれに背いたものであるわけです。そして、こうした「である」と「と思われる」との食い違いが生じうるということは、ある活動がなんらかの規則のもとでなされるものであるための**必要条件**をなしています。さもなくば、計算にせよ論証にせよ文を作る際の言葉選びや並べ方にせよ、正しいと思われさえすれば正しいということになっちゃいますから。つまり、次の⑤が成り立つんです。

> あなたのある行為が、計算、論証、作文などであるためには、
> 【その行為は規則に適っているとあなたに思われているが、実際には、それは規則に背いた行為である】という事態
> が生じえなければならない。　……⑤[8)]

ところで、論子さんは先ほど、「ある行為が規則に適っている／規則に背いている」とは、本当は、「私に生じたある一群の**感じ**が規則に適っている**感じ**を帯びている／規則に背いている**感じ**を帯びている」ということなんだとおっしゃいました。つまり、こういうことですね。



……⑥

8) この⑤は、ウィトゲンシュタイン『哲学探究』のよく知られた次の一節に示唆を得たものだ。
それゆえ、＜規則に従う＞ということは１つの実践である。そして、規則に従っていると信じていることは、規則に従っていることではない。だから、ひとは規則に＜私的に＞従うことができない。さもなければ、規則に従っていると信じていることが、規則に従っていることと同じになってしまうだろうから。
Wittgenstein, L.(1953) Philosophical Investigations, Basil Blackwell, I-§202.［藤本隆志訳『哲学探究』（大修館書店刊『ウィトゲンシュタイン全集８』、1976年）、第一部202節。］

では、この⑥に従って⑤を書き改めてみましょう。つまり、⑤を独我論に合うかたちへと変換するわけです。そうすると、こうなります。

> あなたのある一群の**感じ**が、計算、論証、作文などであるためには、
>
> 【その一群の**感じ**は規則に適っている**感じ**を帯びているとあなたに思われているが、実際にそれらが帯びているのは、規則に背いている**感じ**である】という事態　……⑦
>
> が生じえなければならない。

さて論子さん、この⑦の点線内をごらんください。⑤同様、⑦においても、この点線内の事態について「生じえなければならない」とされていますが、実際のところ、これ、生じうるでしょうか？

論子　いいえ、生じえませんね。なぜなら、一群の**感じ**が帯びているのは規則に適っている**感じ**だと私に思われているなら、実際にもそれは規則に適っている**感じ**であるのですから。先ほど問い②へのお答えとして述べたとおり、**感じ**とはそういうものです。

篠原　ええ、論子さんとしてはそうおっしゃるほかないでしょう。でもこれは、あなたにとってかなりまずいことでは？　だって、⑤を独我論に合わせて⑦に変換すると、計算や論証や作文など、規則のもとでなされることが可能であるためには生じえなければならないことが、生じえなくなってしまうわけですから。困りましたね、論子さん。どうします？　あなたには打つ手がありますか？

論子　⑦を、それゆえ⑤も受容しない、という手があると思います。

篠原　でも、それをやっちゃうと、計算にせよ、論証にせよ、文を作る際の言葉選びやその並べ方にせよ、あなたに正しいと思われさえすれば正しい、ということになっちゃいますよ。

論子　わかってます。独我論の帰結である以上、私はむしろ、すすんでそう認めようと思うんです。

篠原　本気ですか？たとえば「**57＋68＝？**」という足し算問題に、あなたがいったんは「**124**」と答え、すぐ後に「**125**」と言い直した、という状況を考えてみましょう。実際あなたにも、何かしらこれに類することはこれまでにあったはずです。さて、この場合あなたは、「答えは**124**だと先ほどは思われたが、実際は**125**である」と判断したんじゃないんでしょうか？

論子　いいえ、違います――と言うほかありません。そう、私に言わせれば、そういう場合、足し算問題の答えは変化したんです。すなわちそれは、「**124**」だと私に思われていたときには、まさに「**124**」だったのであり、そして「**125**」だと思われているときは**125**であるのです[9]。

篠原　足し算に唯一不変の正解は無いということですか。

論子　そうなりますね。

篠原　あのね論子さん、あなた、一つ大事なことを忘れてます。

論子　え、何をです？

篠原 「57＋68＝？」という足し算問題に唯一不変の正解が無いとしたら、それは計算とは別のゲームです。そうでしょ？そこでは、計算の正解／不正解という概念はもはや機能していません。ただ「正解」「不正解」という言葉が残って空回りしているだけです。結局、独我論のテーゼであるあの①を導入したことで、あなたは計算から本来の正解／不正解という区別を奪っていたんですよ。これを奪われちゃったら、そこに残ったものは、もはや計算じゃありません。計算もどきです。言い換えれば、「加法規則に適っている」の代わりに「加法規則に適っている**感じ**を帯びている」でやっていこうとしたら、計算とはまるで違う奇妙なゲームを始めるほかない、ということですね。

むろん、言語規則のもとで言葉や文を操るということについても同様です。「言語規則に適っている」の代わりに「言語規則に適っている**感じ**を帯びている」でやっていこうとしたら、論証の妥当性／非妥当性、話の整合性／不整合性、文を作る際の言葉選びやその配置における適切性／不適切性といった概念が機能しなくなります。それゆえ、さきほどあなたが独我論の正当性を示すべく行われた論証や説明に見えたものも、①を前提するかぎり、実は論証でも説明でもなく、一連の文ですらなく、せいぜい論証もどき、説明もどき、文もどきだったんだ、とせざるをえません。それどころか、①を前提するかぎり、当の①を１つの文とみなすことさえできません。どうです、見事なまでの自己論駁じゃありませんか。結局、計算、論証、文の作成といった規則にもとづく営みを不可能にしてしまわないためには、あの①を偽と認めて、独我論を取り下げるほかないでしょう。どうです論子さん、反論できますか？

さて、独我論子さんに活路は残されているだろうか？　少なくとも私には、それらしいものは見いだせない。

（2014年10月31日受理、12月３日掲載承認）

---

9) 世界は**感じ**でできているとし、さらに**感じ**の同定は不可謬であるとする論子さんには、

［a］**57＋68＝？**の答えは**124**だと先ほどは思われたが、実際は**125**である

といった判断のみならず、たとえば、

［b］あれは蛇だと先ほどは思われたが、実際には朽ちた縄である

といった判断をする余地も無い。なぜなら、［b］が述べているのは、［i］自身の視野に現れた縄状の色斑を彼女が誤って蛇状の色斑だと思ったということであるか、さもなくば、［ii］論子さんの視野に現れた色斑は蛇状で、それゆえ彼女はそこに蛇がいると思ったが、彼女の眼前（すなわち、目の前方）の物体は縄だった、ということだからである。

しかしながら、［b］のような判断をなす余地が無いことは、［a］の場合とは違って、彼女をいっこうに困らせない。彼女には、「あのとき私にはあれが蛇であるように思われましたが、実際には蛇ではありませんでした」などと言う必要が無いからだ。そのかわりに彼女は、こう言うのである。「あのときは、まず蛇状の色斑が現れ、そののちそれが縄状の色斑に入れ替わりました」。